へ 13
2906
4

高輪本跡

春曉八幡佳年

為永春水作
歌川國直画

保壽堂
平村堂合梓

門 へ13
號 2906
巻 4

昭和九年
七月五日
購求

新・夜珠賞

序辭

婦賀川に水清くば連雁の醉ひ洗ふ
濁らば陸歩の足にあらぬべし清
き所にあらば人ぞ何粹と阿那とにも
奈賀街に愈の兼ねての入船出来
其れに慈に清き抹香

旬ままに成明がらも又今し
わかきしをいまし鹿の柳のもうしを
清きまくもあまたみくもあまたがみくも
何ぞ嫩の嫩の嫩の嫩の嫩の嫩の
宮の何にも知らぬのごとき
若俄が宴の鑿を酬の嘗の晴寞

木場の陸鍋より工夫にしたる新奇
如菓さわを觀まゝ彼連挺も絶ぶりを
きこし陸ぶりまゝ舟にて通ひ人実
婦賀川の瀬向にて清水なりと
看宿きそふて出あるべ書雖も忽地
富賀岡のめぐえあり標題まゝ名を

あふ八幡佳称八方を郷奇なる高
深を廣幾なるを作者にかなりて
板元のあるじ及ばるゝ數を寒の
千時を保七年
丙申の青春
はしじめ入年
述ぶ

柳吉

和歌町の唄女
梅吉

秀八が恋郎
弥三郎

婦多川の
唄女
秀八

春曉八幡佳祢

全本十二冊　發兌

平林堂

春曉八幡佳祢二編巻之壹

江戸　爲永春水著

第七回

月下氷人の所爲といはゞ月老も悔る業あるかをもしく
一個の通子なる彼孫三郎のたらぶるも松本の奇遇に秀
八との恋情脱に百年の苦楽をこゝの心に發し翌夜と
整りなる三藁の家も干ね中にまとも御手紙のもよい
たらぶる身投げにまたまぶ君にたらんや正にこれ天性の

美人にして頼まれるる乙女なれば浮屋に似たれど凡
慌のゆえがたくしておいとむいたづら心成發しけるが和はよふ
やく和宿の河岸に着く着ハハ棧だしに又よし成引付
美「モシ」起して明させまたからチット乗にお出なせ人まし ト欠
出して行 美「旦那がお帰りでござ人またヨトいそく ト たてけば
新門まハ女房お竜 「アイヨ 美どイか今明るヨ今夜アお
捨びごらうと思ひたからツイ 寝たいなト いひながら戸を
あけて 美「まや 泳ぐとさんハ 美「エまだ和にお出なせ人また

が巾 弦をとりに乗りました 美「まや旦那のおもたものはどうした
美「泳ぐとさんのハ五ゆんが娘ゆ子のがごぜ人ませんお前さん
のでもおかしなせ人ト おかめのげたを 美「さ也 娘ばとハ何のことだ
美「今ハコトリゆもその娘でざんなにひまが入ました

なう」ト いひつゝ留守へかけて来る 女「一ぎや 旦那大きによ夜がふけ
ました子「今夜はぜひおとまりなさるがよふござりますと夜ドまして
手ウ 「お茶も何もさしあげましたら今こしらへまするヨ 詠「ナニ モウ
御かまひなさるな かまいなさんなそれよりはご無拠連が出
来ておまへのお顔が此子も止宿てのぞみけりまするが あら
ねへがいゝのサ 女「旦ござりますとも二階が座敷でござりますも
あら何處へでもおいでなされますヨ ヲヤおまへさんのお奥へいらつ
しやいましト いひながら娘の 詠「お出でなさいこの子をつれてふ…
お客さまがして居る女サ 女「此見なさいまし大夫がおあつらへ
なア 女「イヱもふお泊まり申ませんサアマアおかへりなさい
まし 豆 毛「旦那へおまへさんヲ此様な美しいお娘を何處へ
つれなさいまし 此所のあるまへ 詠「ナニサあゝヲわれ…
くもいゝ事もなく何とねへのござります此娘の形をコンなる」
大黒ヤどこで悪い帰ってこいつら我ずか者がかして気せて此娘の気
ものはひどくなるいぞされ 女「まアどうしたで男の好物で帰ておいでなさる
流行しまして其の上にどやら機にてそれでもお客さまがゆへ

亀「こ 攙搶ものといふが常代の事中々まこと〳〵におお方
とおもふ〳〵 年よけて親へあげるとそれから直に旦那さまのお座
サ 糸「ほんに おまへも親へわたるのはそれまでもよくおかげがあるツ
さお前さまに若どん気をつけて下さるべいのに 亀「アイ此の
中々ヤアござんません 糸「ソレまく何處ぞへ ト まづお前に言はれて 若衆ハお前さまに
ごまかせなさんす 孫「おらア お稚でお江戸へ若とふへ今夜アどうぞ
若ぞそのさ 亀「なくえぞねむく お体まる世でまし 寝むく
なりまする 糸「わんまく御苦労ぢゃ お飯でも給へて寝さ

ド。そのうち私ハ二階へお床でも敷に来ようト 二分のおあしを
若衆「サア旦那へお床敷ましたからお休みなさい
まし 孫「彼ここに明日からお世話になる
その若どもとおれをしらせ 糸「アイ お礼へ入
ませんからどうぞ気のおわる人中々よお願ひ申ます
ら 若どん 亀「ヘン 今夜私なんざア ほどろしとらよ
同じ合点しる御利益なせへまし 糸「ヲホヽ 旦那へ私
どもは独身でござりましたから 何分お頼み申ますヨ

和音泉也
泉屋

孫「ヲヤ親方ヨビふしこ 多「中條やの具服と旅田さま
ろう廉寄さまの方へ来ましこ 孫「どふりで今朝来こ
まコんへ祝へと思ひこドレく痛やせう。アノ悪こうや明日
まこ稲荷横丁まで往てあらかふぜ 多「ハイ 横川さん
とよいか子 孫「そ此る宝ふ来まれこ延るまをツイ今日も
ヨとまてこらト いひながら二階のちしごく二足三足 孫「
おいらア明日 多「ハイサア おまへさんも二階へお出なさいまし
お蒲團もあてありまへヨ 女「ハイ わりがこうございまんト
ぶつくとあがりかまるもまゝを
さつしてきそんの女ぞうおかめ 多「ド」二階の猪手が忘れまいる
サア お連ゆそふ お出ヨト せんそらまく絵方なく後
まつれそひ二階へあがまいが女房おかめは居骨して 多「
アレ阿所がお前さんの妹ぶらゆるりとお休なさい
まートいひ乍下りてゆく後にお悪いいとゝ御かしく 多「
宮お鉢ゝ掛りこうへ 孫「イエくまご痛やせんサアちつ一声
いろ一ぶくお呑なさいく事あまうひるゞごけのよおあらの乗
がモウおしおそいかさまいらごと今附かいそのかハひとしい

今ハ志ようといふだかりでも八重十文字ニ強欲をしてむ
といふのごのそして重ねる成何所ゟ事ニ小サクと云く
親ニ金成日にして此四月ありを連て往く重ニ中間ハ
何所ごへ「アウ何でも新下中ニの様ニ潜しハ所で迷
ニそれが私を重所で私成妻ニ出るといふ旦那の親の
おそろしさといふものハ手きりくと日くッてそして病気で
新親が罷まかり出て居ましたハ「イヤそりやア大喜ごと文
うとゝみくその人ニいふ成きうせらまたのか「イヱく

そまが爲ごうら逐出したのでございました「そんなうまた
私なまでも子親の所へいけばいるヨ「イヱ親父ハ私成今
おれなしゆゝ宅へ夜つまて往て生宅からお金を更とつて
かまひなしとうの親父成日にして堂くの田舎へ往て住まひ
ましたハそして猟舎ニ居ましたるが出来たそうでございま
ました「ハテナ宅とも賣て住まつたのごとゝ見へまゝ その後ずと
いふのハ半田川へ住れ以前ハ仁田の妻日の近所ニ居て金
かしでハあるさう「て左様でございましたハよく出来でございま

ことごと御内では済ぬと どんなにか苦労致しましたらう
このお方致主人の気で 毎々大事にして居さの紙くづひ
それぞと云つてわるまし ト すだらうこれならしきつと主が縁の
とら見てとるのすゞめのなる紙屑とらへ
出あれ 「イヤ それやア とんだ それのござりまして 美でもとし
まく
拾るまいが わるものゝ他にまれいと嘘ごといひまちアよく
ときるる気と丈夫よしる及ばぬ なげうちまへいづれ万事
を引請てカになつてやらう ト 紙屑の紙かへるひゞ
寝る時の八大事の縁。コウくと笑ひけり

第八回

逢菜の溝よりまねかれ あふみかの紙屑とわざわいそへ
流れと中めてともまたかまでは溝中にて清き流れと汲みる
わが身の懸りさへ主人毎よなかゝん あれ苦労致うき
思ふ楽しみるも月のわるべきかきよて 嘆きもきもなるか
なるひの世の中を恨みひ気とげし 逝返わが人情の繊紙
形はそのぞうしらぬ何程の裏なつけん言葉なく身がら
まで路次のかたのきぬのかたの端清くのせし 大東屋の隅の下よ

一新のたなまこ家あつこ是も同じく古家にて傾く新の
国に立ば前是かく里しひさしうへは物干さぐとなりて不自由
なまでどもと妓女屋の女隠居が住居し完也人に庵生祇
附にて新合のように貸居也人今も所居となるゆゑしさて
此家の主は何渡世か知らねど門義さんは年の頃三十二
こゝもう清く志はといふにはあら稔ど何是苦労人とか何
とか他の国に清く婀娜な業増女
玉他の小無芳かし赤そのあるあび茶む中古品に

笑し引解なるべし狗は絹紅の古紅を付据也し人花
色志多の鯨さしにて一尺九分切ぐらゐなるを深く付
下品は紬のお納戸中ぐらおし義は清くらごといえ
是ら我義紅にて紫の中形ちりめんの縞伴の事矜
渉黄つらんぎ人雑ぢりめんを毛援合せに付くる縞
まの袖常は妓女がこ垂流しにまるといふ我等にて請
させて黄ひし黒天鵞絨の巻帯なり
赤地色に塗し菊大柳の隠人志ぐらもなく座り所望にて

一中郎我渡川て居る

「仙所とさして自然ら何ぞと人の問んまい

「雲となつて消さいよト入来るものは唄女の秀八 秀「おとゝ

さん 附「まや秀八さんどふをしごは又日さろぞりお出でないま

秀「マヽ自然居士が宮お拝ごうう覚へて志まひさいと思

つてけまどモウヤヽ此日の日老は苦労なことが出来て志れ

さつてどふもく聲情であらないから別段で居ごが子

まことあくく考へてゐると梅吉さんの母ゆうに腹気はなりて

死んでも清まらないと思ふから 附「まゝ梅吉さんそかはい

そふに死んだのうへ 秀「アレサまだ死ぬ者ないが子後に別

いそうだヨどふもよくなりそふもないといふことだから

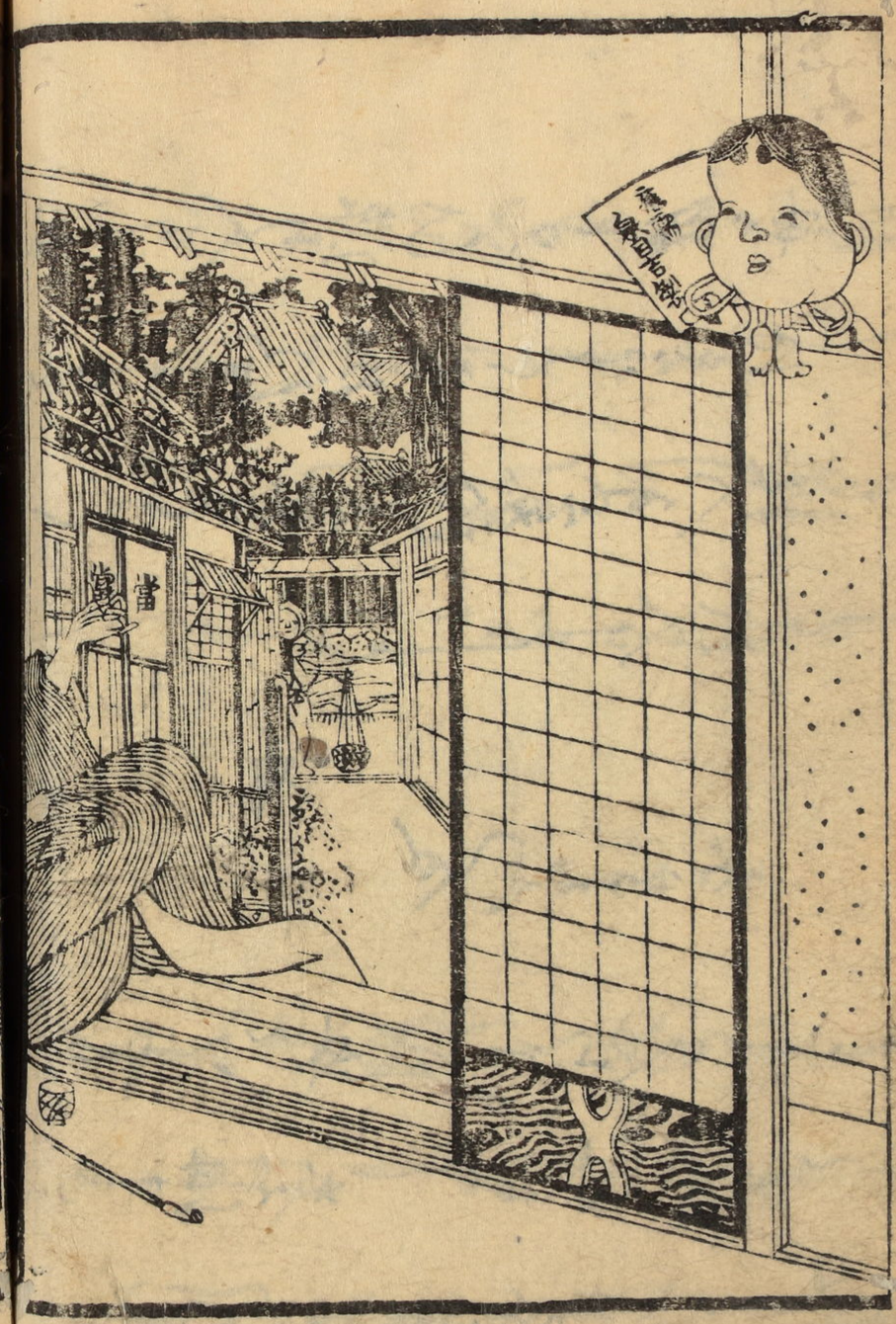
附「まや左様久おまへの言様がコりいから私しやアまた死

でもしたのうと思つたヨ 紙気茶のつまごのにゆ 秀「アレ左様

いふ中は私きやア婦婦のゆうにしたらどふぞ性質して

ゆりてくヨ 附「サア ト 烟草の残付て出し「そりやアいくがおまへの

苦労は何だへ老は出来ことを云ちやアどふも おつしいる



時「左様なら」ト言ながら三味線を粂八の側へさしよせ「サア
仕舞の二上りで弾て御覧なヨウ大概出来さうぢやアありさ
之 粂「ナアニまだヨクもしてをらぬから何もかも手すれて
来ませんから 時「ヨヤアそれでもさつきのよりはおれへトいふ折から階
ト外の方で「お時さんお宅かへ 時「アイ誰さんかへトいふ
せん方の声を聞て二階の階子おりる音 粂八の方へ
来るを見てそつと 粂「アイ 出「イヤ
をしたばかりで 粂「アイ二階へおのぼり
階子の上の大勢ごとサ出 出「イヤ粂八さん
やしよ宿の宅代等 時「大門くゝ不人遊ぶト二おお時さん被直

之 時「てまへがた今日ハ是非おいでのはづだヨ そうだトニ
階へ拵へさし 時「粂ト言ながら居るかへ トいひながら 出「皆く
来いトいふ 時「後ニ来て出精する 出「左様サ今日ハ今ッから
皆来と共にその所へ出かけやういつまでも来なや甘う 宜
来て粂さん出雨ようと 粂「ヲヤおわたびる ト出て おまけ
二階にござる居るのを 時「ナアニまださうだども どれ おれ
がおれへおめへ居るのサトいふ時二階にて見てまへしも
上にきり少々へ姉さん 時「アイヨ小用之雑も急に入

所に来る

夷「誠にかゝるゝらしい美しい娘ぞれ人どよ志えんぞ 附「十二
私の前年から仙女出くしたる人が連て来て頼んぞ子
稚くとむづかしい引かゝるので先へ渡り残付るのが
ひどく面倒ごといふるぞがどうなるか何でも娘もそのお
方も気だかりもんで居るハ字 夷「ア、娘ぢやア随分気残
もんでもいゝ程へ定めて男もいゝ男ぞかうね 附「ア、好漢ぞ
けまども菓が修程ちがうて居るヨそして男の方しやア

かゝひがる中にもおしゝ美しい残いふ様なるもあるかゝ志の
かり知まるいが子モウ〳〵娘のそうでハ美も主人が二の
足ごと歩に死ねと言て居るがひどく娘こんぞだやア
ないか 夷「ヲヤ 志様へ勝ハねへそして二階へとまるのか
附「ナア二 生様なことハないヨそれにあの子残連て来てから
まぐ一度しか来ないからくらしくハ知まるいヨそうやア志様
とおまへの気残もんで居る吐しいぶんいふ事ぞまア
そまへ残おもなしでないか 夷「ア、足非おまへ不たなしく

秀の郎くり紙三郎の当歳着安よろしく案のふべし
門人春雅曰予師狂訓亭例の玄筆我ゆつて此
源我繋り一冊の持成て後門人等たゞ右にむかひ
手貫山猿の案をあらはべし秀八が云紙三郎三人の
前に云いかにとまるや予答ていふ彼梅ごとくなる
お嫁来八に国のいぶや先生こゝに筆我
玄筆をしてり
狂訓亭の門人
狂言亭春雅写

春曉八幡結称二編巻之一